

船井情報科学振興財団 2013年度 留学前報告書

ケンブリッジ大学工学博士課程デザインマネジメント専攻
重本祐樹

2013年度 Funai Overseas Scholarship 奨学生に採用して頂いた重本祐樹と申します。今秋の渡英を控え、私の博士課程進学までの様子を報告させていただきます。

【留学志望動機】

私は修士過程をオックスフォード大学で修了しました。なので博士課程も海外で進学するということに関しては、さほど特別な感覚は覚えませんでした。「海外の大学院」というよりも、「ケンブリッジ大学のデザインマネジメント専攻」で研究を続けたかった、という思いが強いです。理由は明快で、

①自分の研究内容とケンブリッジでのデザインマネジメント研究が合致していた。

②世界的権威と名声を誇るケンブリッジ大学のリソースと矜持を享受したかった。

という二点です。つまり、自分の研究を発展させられる環境が現実的にあるのか、自分を心情的に鼓舞できる環境であるのか、この点が自分の大学院選びにおいて、最大で唯一の基準でした。

留学に興味を持った発端を改めて考えてみると、高校三年生の夏の英国イートン・カレッジへの交換留学は、大きな転換点だったかと思います。当時は英語も全然できませんでしたし、学問や伝統の何たるかなど全く分かっていませんでした。ただ、イートン・カレッジの趣のある佇まいを前に、こんな場所で過ごせたら格好いいな、という憧憬の念が、そこはかたく芽生えました。この経験を機に、漠然とはありますが、大学では英国に留学をしてみたい、と思うようになりました。しかし、**英文学等にはあまり興味は湧かず、英語は意思疎通が出来るレベルで使用できたら良い**と考えていたので、「将来一番役に立ちそうである」という理由から、立命館大学経営学部に入りました。

立命館大学在学中、念願叶って英国レディング大学へ半年間の交換留学に行けることとなりました。留学中に、イートン・カレッジからの友人に久しぶりに会いに行くと、彼らはオックスフォード大学の日本学部で学んでいました。オックスフォード大学には修士課程でも近現代日本研究科があることを発見し、当時日本的デザインのアイデンティティの源流に興味のあった私は、「これだ!」と思い、このとき密かに大学院進学を決意しました。しかし、ここでも強調しておきたいのは、私は**単に大学院に行きたかったのではなく、オックスフォード大学の近現代日本研究科に行きたかった**ということです。したがって、院試においては滑り止めを含め複数校を受験するのが一般的とされていますが、私の場合は単願と決めていました。

修士課程、博士課程の出願を通じ、アメリカを初め他の国の大学は視野に入れなかったのか、という質問をしばしば受けますが、答えはオックスブリッジ以外興味が無かったです。研究レベルや知名度で言えばオックスブリッジレベルの大学は他にもあると思います。しかし、初めてイートンを訪れた記憶、オックスフォードでの受験決意、また、レディングでの生活を通じて見つけたイギリスの文化、そのどれもが研究環境と同等以上に私を駆り立て、オックスフォード大学、

船井情報科学振興財団 2013年度 留学前報告書

ケンブリッジ大学工学博士課程デザインマネジメント専攻
重本祐樹

ケンブリッジ大学以上に、私にとって魅力のある大学はありませんでした。大学院留学に際しては、担当教員や大学の評判、卒業生の進路等、気になる点はいくつもあるかと思います。しかし、博士過程という並々ならぬことへの挑戦においては、最終的には精神論や根性論は非常に肝要であると私は感じており、それゆえ所属している大学に愛着、矜持を持っているか、換言すれば、その大学のメンバーであるという事実が、自分の精神的支え、ならびに是が非でも博士号を取得してやるという意気込みの着火材となるのか、この点は大学選びの際に大いに検討される価値があると私は思っています。

【出願プロセス】

ケンブリッジ大学への合格は、正直なところオックスフォードで修士号を取得したことにより、比較的容易に得る事が出来たと考えていますので、一番苦勞した立命館大学からオックスフォード大学に進学した際のことを中心にご報告させて頂こうと思います。

まず、全体像としては、私の出願プロセスは少々セオリーとは異なるかと思います（ということの後から知りました）。というのも、私は皆さんが一般的にするであろう出願におけるロビー活動を一切しなかった（そういったことをすると知らなかった）からです。具体的に言えば、修士受験のときには、合格通知が来るまで一度も出願先の先生にコンタクトを取ったことがありませんでした。博士受験の際も、自分の専攻に所属している先生に一、二度コースについての質問をメールしてみたものの、返事は頂けず、結局書類選考の後の面接で初めて言葉を交わすこととなりました。私がした事は、単純に志望学部のウェブサイトから必要書類や条件、締め切り日を探し、それらを提出するという真っ向勝負でした。そういう意味で、修士過程、博士課程のどちらも合格した際には、大学院入試に通じていた先生や友人からは驚かれました。結果的には合格したものの、このとき初めて大学院、特に海外の入試においては、合否に際して担当教員の一言の重さ、そしてそれを取り付けるための密なコンタクトが、セオリーとして非常に重要であると知りました。しかしながら、セオリーはセオリーであって絶対的条件では無いので、結果論ではありますが、私は自分のやり方で良かったと思っています。私の場合は実直に、考えを迷い無く突き通す時に一番エネルギーが発揮できると思っているので、下手な小細工をすると却って良くない結果になっていたかもしれません。

また、修士課程合格までの最難関要因は、英語の試験 IELTS でした。これは日本人はもちろん、多くの留学生が頭を悩ます障害ではないでしょうか。とりわけ、オックスブリッジでは、英国の他の大学に比べ、入学要件のスコアが 0.5~1.0 ほど高くなっています。私の入学した近現代日本研究科の入学要件は、IELTS Overall 7.5 (Minimum 7.0 in all components) でした。このスコアを取る為に、英語の勉強を約一年続け、特に条件付き合格を貰ってからの2ヶ月ほどは死にもの狂いで勉強しました。結果から申し上げますと、私は上記条件を満たす事が出来ませんでした。

船井情報科学振興財団 2013年度 留学前報告書

ケンブリッジ大学工学博士課程デザインマネジメント専攻
重本祐樹

Overall 7.5は取得したものの、その内訳がListening 8.0, Reading 8.5, Writing 6.5, Speaking 7.5と、ライティングのスコアが各スキルの最低基準をクリアする事が出来ませんでした。しかし、私はどうしても諦めきれず、学部の手紙を書き、入学許可を嘆願しました。すると、夏の語学コースへの出席を条件に、英語能力要件を免除して貰うことに成功し、晴れて入学許可を頂きました(とても嬉しかったです)。英語要件クリアが遅くなればなるほど、精神的にも経済的にも(IELTSの日本国内での受験料は、1回あたり約25000円です)非常にきついで、これは早めの対応を本当に強くお勧めします。

最後に、海外大学院進学に関するもう一つの非常に大きな問題が、学費の支払い能力です。オックスフォード時代の友人たちもほとんどが何かしらの奨学生に採用されており、皆口々に言っていたのは、このお金を取れなければ大学院進学は諦めていた(諦めなければならなかった)、ということでした。ただ、今この文章を読んで頂いている方はFOSに出願する、ないし既に採用されたことと思いますので、この部分に関しては、今回は割愛させていただきます。

以上が私の修士課程および博士課程の出願プロセスです。これから受験する方が一番気になるのはやはり合格できるか否かだと思いますので、確率論で言うのであれば、他の奨学生の方が書かれている報告書を参考に、セオリーを踏襲された方が良いのかもしれませんが。私の場合は「こういう合格の仕方もあった」という参考程度にして頂き、来年度以降のFOSの皆さんの合格の一助にして頂ければ大変嬉しく思います。

【これから留学を目指す方へ】

私自身まだまだ学ぶ身ゆえ、大層な物言いができる人間であるとは微塵も思いませんが、船井情報科学振興財団が認めて下さった大学院に合格した一人として、私がお伝えできる留学に関するヒントを、ここに書き記そうと思います。

- ①必要な情報を可能な限り早く、正確に、漏れなく把握する。
- ②英語の試験はとにかく早くクリアする。
- ③可能性が明らかにゼロでなければとりあえずやってみる。
- ④身体を鍛える。(受験には体力大事ですし、運動すると頭がリフレッシュします)

研究内容や成績については、今この報告書を読んで下さっている皆さんなら問題ないと確信しています。あとは**自信を持って、夢中でやること**が、その人の眠つきを変え、行動を変え、人生も変えるんだと思います。

さてさて、マンガのような台詞を言い出した所で、この辺りがお後がよろしいようで。

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。では僕も頑張って来ますΣd(・ω・)